奥州の名所々々を心に探り〳〵氣をつけて行くに、先づ第一番に白川の關の關屋の跡がなつかしく、見たき儘に古道から進みて今の白川といふ處も越えた、既にして岩瀬郡へ行き、乍單齋や等窮二子の芳扉即ち門の戸を押して訪らつた、彼の支那の詩人が陽關を出づれば故人なからんと言つたが、今ま二子に逢つた心持は全く陽關を出て故人に逢つたやうなものぢや、といふ前書。陽關を出て〳〵を陽關の出て〳〵としたのは音便を用ひて謠曲などの風にやつたのであらう。奥州へ來て田植歌を聞いたが實に風流といふ事のはじめのやうに思はれた、といふ句の意、それを言葉ではじめであると言切つて興じたのぢや。裏面には久しき旅路で風流の興などもなかつたが、今ま奥州の二子にあつて風流談を試み、始めて面白かつたといふ意をも含んでゐる。

しのぶの郡忍ぶの里とかや、文字摺の名殘とて、方二間ばかりなる石有り、此石は昔女の思ひに石と成て、其面に文字あるとかや、山藍すりみたる〳〵故に戀によせて多くよめり、今は谷間に埋れて石の面は下さまに成たればさせる風情も見えず侍れども、さすがに昔覺てなつかしければ

さなへとる手元やむかしゝのふ摺

しのぶの郡忍ぶの里とかいふ所に文字摺の名殘ぢやといつて二間四方許の石がある、此石は昔し或女の一念で其身が石と成つたので其の面に文字があるとか傳へられてゐる。其石へ山藍をつけて文字の摺物をしたので、其の山藍をすりみだる〳〵といふ所を戀に心が亂るゝといふにかよはせて多く歌などによまれてゐる。此石も今は谷の間に深く埋もれてしまつて文字ありといふ石の面の方は下方にな

つたので、昔しのやうな風情は見えぬけれども、さりとて流石に昔しの事が思はれて、なつかしくあつたから此句を作るといふ前書。

折ふし早乙女が早苗を取つて居たので、其の早苗を取つてゐる手は昔し忍摺をした其の手であらう、此村の人が昔しは忍摺をしたと思ふと今ま早苗とつてゐる手も左樣に思はれてなつかしい、といふのを現在の早乙女が即ち昔は忍摺をしたのであると言つたのぢや。昔しの忍摺時代と現在芭蕉翁の時代とは非常に隔つてゐれども詩人は時代などに頓着なく專ら理想的に物について打興ずるのである。

尾張の舊交に對す

世を旅に代かく小田の行戻り

尾張の國の舊い交友に答へた句。

代かくとは田の苗代の水を時々搔き廻すその事をいつたのであらう。自分は世の中を旅にくらして東西に行戻りする事數度で、その行きがけにも歸り途にも小田の苗代をかいて通る、といふので、實際左樣な事のあるべき筈はないが例の詩興より斯く云つて、裏面には此尾張の國は度々往來して諸君と交はり、いつも諸君の俳席を搔廻して失敬をするといふ意を含めてゐる。

附記、紀州邊では苗代を田の代といふ由。

藏田氏の亭

柴つけし馬の戻りや田植酒

或る城下などへ柴を馬につけて賣りに行つた、其歸りがけには柴は賣れ切つて馬には田植祝に用ふる酒樽をのせて歸つたといふ意で、折節田植の時候であつたから農家の興ある事實を詠んだのである。

書見れば首筋赤き螢かな

螢は夜は光つてゐる、晝になつて如何なものかと見ると首筋の赤い虫であつた、といふので、何の巧みもないが咏物としては一寸輕ろく可笑しく出來てゐる。

草の葉を落るより飛ほたる哉

今迄螢は草葉に止つてゐた、それが風にでも吹かれたか落ちた、落ちたかと見ると飛び去つたといふので、細かい處を面白く現はし殊に落つるより飛ぶといふ言葉は天明としか思れぬ。蕪村顔色なしぢや。

木曾路の旅思ひ立ちて大津にとまるころ瀨田の螢を見に出て

此ほたる田毎の月にくらへ見む

今は大津に宿泊してゐるが、是れより木曾路にゆくのである、木曾へつく頃は秋になつて更科の田毎の月を見ることでがなあらう、その月と今宵の螢と何れが趣が深いであらうか、競べて見たいものぢやと言つたので、旅中の興としてはコンナ句もあつて好からう。但し名所を比較すると見ずに瞬間の興と解するがよいのぢや。

上林三入亭

螢見や棹郎醉て覺束な

上林氏三入といふ人の家で作つた句、大かた瀨田螢見の歸りにでも立よつたのであらう。

舟にのりて螢見に出た、面白かつた、自分も酒のむ、船頭ものむ、其内に船頭が醉つて、此舟をどうするかと覺束ない心細い氣味になつたといふのである。或いは事實あつたことを詠んで三入亭の座興にしたものかも知れぬ。併し餘り佳句とは思はれぬ。

おのか火を木々の螢や草の宿

木立がある。螢が飛びめぐり或いは其枝にとまつてゐる、それが恰かも木々の花のやうに見える、其の木々の花を現出した螢自身が又其の木々の花を宿としてゐるといふのであらう。奇拔で且美しい景色であるが少々巧みに過ぎたやうぢや。

秋の坊を幻住庵にとゞめて

我宿は蚊のちひさきを馳走かな

我宿へお止め申たが何も御馳走はない、マア蚊の小さくて強よく刺さぬだけが御馳走であると言つたので、佗び人の生活をよく現はして滑稽味も帶びて面白い。

まことに須磨明石の其さかひは、はひわたる程といへりける源氏のありさまも思ひやるにぞ、今はまぼろしの中に夢

をかさねて、人の世の榮花もはかなしや

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

まことに須磨と明石の境界は彼の源氏物語に這ひわたるほどと言つたほど近い地續きぢやが、それを思ふにつけても今は昔に非ず、古來數多の人は幻の中に夢をかさねて居たのぢや、人の世の榮花といふものは果敢ないものである、と歎息した前書。

須磨明石の接近してゐるのを這ひ渡るといふ所から季節の蝸牛を思ひ出で、蝸牛より支那の蝸牛角上の爭といふ事を思ひ出で、そこで蝸牛よ其の角を須磨と明石へ振りわけて見よ、と一時の興に托して榮枯盛衰の定めなき人生を歎じたのである。併し表面は何處迄も蝸牛につき戯れて其角をふりわけて見よ、須磨と明石へと滑稽に言つたのみと心得べきぢや。

許六が木曾路に赴く時二句

うき人の旅にもならへ木曾の蠅

これから木曾へゆかば定めし蠅の居ることであらう、お前はうき人の旅にもならふて見よ、即ち自分のやうな旅にもならふて見よといつたので、蠅も佗びたもので且時節が蠅の居る頃であつたゝめ個樣に言つたのみで深い意味はないのぢや。うきとは例の內實得意。

椎の花の心にも似よ木曾の旅

椎の花は華やかでなく淋しいものぢやがお前もアノ椎の花の心にも似て見よ木曾の旅中では、といつたので、椎の花は淋しい處から風雅の心に比し此心を失はぬやうに旅して來よと誡めたのである。

尿前の山家

蚤しらみ馬の尿とする枕もと

芭蕉翁が陸羽行脚のとき、或所へ泊つたが如何にもきたなくあつたので、それを尿前の山家と可笑しく言つて前書とした。

蚤がゐる、しらみも居る、いぢめられて苦しくて眠られぬのに又枕元では馬の小便をする音がする、實にわびしい泊りであるわいといふ旅中の情懷を叙したのである。

清風亭

はひ出よかひ屋か下のひきの聲

かひ屋は蠶を飼ふ家、夕ぐれ其の飼屋のの椽下あたりで蟇がないてゐた、其處で其の蟇に向て外へ這ひ出て來よ、鳴いてゐる聲の蟇よと戲れたのみである。

竹の子や稚き時の畵のすさび

現在に生えてゐる竹の子を見て、竹の子やと言ひ、それにつけて幼

き頃竹の子を畫いた事を思ひ出して、コンナ竹の子をかいて遊んだ事もあつたよ、と今昔の感を叙したのぢや。以上二句共無邪氣な處に面白味がある。

小督塚にて

うきふしや筍となる人の果

小督は平家物語にある高倉院の寵愛を受けた女、其の塚と稱して京都の西の嵯峨に今でも存してゐる。

世のうきふしは樣々で變遷は實に甚しいものである、こゝには筍となつた人の果がある、人が筍になり果てゝしまつてゐる、と誰ともなくいひて暗に小督の事を指してゐる。若し直ちに小督の果とすれば餘り明瞭になり過ぎて却つて餘韻を失ふのぢやが、汎然と人の果と言つた爲め此句の感を深うしてゐる。初心者の注意す可き所ぢや。

四たひ結ひし深川の庵を立出るとて

黄鳥や筍籔に老をなく

嘗て花に鳴いた鶯も今は筍籔のやうな處に老いた身を以て鳴くやうになつたわい、といつたのぢや。表面は斯樣に唯だ鶯が老年を哀んだのであるが、裏面には自分も鶯と同樣に老いて淋しい身になつたといふ意を含むでゐる。

木因亭竹睡日

降すごも竹植うる日はみのごかさ

竹睡日とは夏季に竹を植ゑる日で此日に植ゑる替へをすると必ず活きて枯れぬといふ昔しからの傳說があるのぢや。尤も通例は竹醉日と書いてゐる。雨が降らなくとも竹を植ゑる場合には簑と笠とを着て居なけりやならぬ、といふ句の意味で、即ち竹籔へ這入つたり竹を

取扱つたりするのに尋常の風體では不似合ぢや、晴雨を論せず蓑笠の風體に限ると興じたものであらう。或いは竹の葉の散りかゝるが故とか又竹梢の露に濡るゝ故とかいふ意味などがあるかも知れぬがいづれにしても蓑笠は實際の必要からでなく詩的感興に依つて云つたのに過ぎぬのぢや。

訪隱者

世の人の見付ぬ花や軒の栗

或る隱者を訪ねていつての句。

訪ねて行くと折から軒端に栗の花が咲いてゐた。此栗の花は世間普通の人の一寸見付け難い花ぢや、と言つたので、裏面には栗の花の華やかならず淋しい處からそれを隱者の世に遠かつて閑居してゐるのにほのめかしたのぢや。

又こえむ小夜の中山はつ松魚

今迄度々初松魚を喰つて味をシメタ、今年も初松魚の季節となつた、又た小夜の中山を越えて鎌倉へ行き初松魚に出會ひたいものぢや、と言つたので、小夜の中山を越す事は西行の命なりけりの和歌を思ひ寄せて我れも命冥利に又た初松魚を喰ひましやうといふ心持を含ませたのぢや。此句も實に芭蕉翁の風懷がよく現はれてゐる。

松魚賣いかなる人を醉すらむ

松魚を呼んで歩行くが彼の松魚を賣つて如何なる人を醉はすのであらうかといふ意で、初松魚の價高く喰つてうまく、それを賣る聲の勇ましく景氣よく、又人々の爭ひ買つて酒呑み打興ずる趣までが此十七字を以て連想される。江戸ッ子としては最も感賞せねばならぬ句であらう。

鎌倉は生きて出てけん初松魚

これも松魚の勇しく威勢のよき處を咏じたので江戸に居て讀んだものと見える。元來江戸地方の松魚は相州から送るのであるから、其の相州を出る時、即ち鎌倉を出る時には生きた儘で飛び出たのであらう、今ま見ても如何に生々して新しいことよといふので、生きて出けんの一語はよく初松魚の氣勢を現してゐる。

やみの夜や巣をまごはして啼千鳥

或夜千鳥を聞いたが暗夜であつた、此時節は千鳥が巣をつくり子を生む頃であるから、今ま千鳥の鳴いてゐるのは自分の子を人に取られぬ爲め其巣はどこだか知れぬやうに鳴てゐる、といふのを、惑はしてと一層強く叙したのである。何となく哀れを感ずる句ぢや。

しら川に住む何云へ文をつかはすはしに

關守の宿を水鷄にこはうもの

奥州の白川の地に住む何云といふ人へやる文の端へ此句を書きつけたといふ前書。

白川は昔の關所である。…爲めに關守を思ひ浮べ其の關守の宿を水鷄に問はんものを、と言つたのである。即ち水鷄はよく人の戸をおとづるゝから關守の家を知つてゐるだらう、何處だか聞いて見ようといふたのぢや。…これ亦た詩人が非情の鳥にむかつての戯れである。而しで裏面には何云を關守に比し、今頃のお宿の趣はさぞかし好からう、水鷄も啼いてゐるであらう、お尋ねしたいものぢやといふ意を含めてゐる。

大津湖心亭

此宿は水鷄もしらぬ扉かな

近江國大津の湖邊の亭の名と見える。

此宿とは湖心亭のこと、其の湖心亭は水鷄もしらぬ扉である。水鷄は戸をたゝくと言傳へられてゐるが此宿は其の水鷄さへしらぬ閑靜な世塵をはなれた、結構な所ぢやといつたのである。若し唯だ隱者の世を離れてゐると言へば陳腐になるのを、水鷄もしらぬと詩的に興じた爲め新らしい興を起し得たのである。

露川かともから佐谷まで道送りして俱に隱士山田氏か亭に假寢す

水鷄なくと人の言へはや佐谷泊り

露川といふ人達が佐谷といふ所まで自分を送つて來て其處の隱士の山田氏の內で一同が泊つたといふ前書。

此邊では水鷄がなくと人が言つたから泊る事にした即ち此佐谷に於てといふので、裏面には山田氏の風雅の人なることを聞き宿を乞ひに來ましたといふ挨拶の意を含むでゐる。いへばやのやは調子を足した助辭に過ぎぬ。

武隈の松にて

櫻より松は二木を三月越

奧州武隈といふ所の松で、古歌もあつて有名な松ぢやといふが、その根本から二ッに分れてゐると芭蕉は紀行文に書いてゐる。

三月越とは芭蕉翁が旅路の日數、其旅路に櫻を見てから此松の所へ來るまでが即ち三月越、そこで或る古歌に此松が二木といふより見きと三木とを通はせた例のあることを思ひ寄せて、此句も二木より三月越と通はせたのぢや。即ち櫻より此松の二木は三月越である、といつたのである、それを松は二木をといつたのは修辭の都合で、

面白く曲折をつけたのに過ぎぬ。併し餘り言葉を弄び口合に流れてゐる所は句としての價は先づ無い。且つ正風以前の口氣ぢや。

短夜や驛路の鈴の耳につく

夏の夜を旅籠屋に目ざめて居ると早や曉近く荷馬の鈴をチリン〳〵と云はせつゝ外をゆく、其音が耳についたのでモー寢ることが出來ぬ、さても短い夜ぢやと、いつたのである。驛路の鈴は古い言葉ぢやが、こゝらでは荷馬の鈴と見てよろしい。

俗士にいさなはれて五月四日吉岡求馬を見る五日はや死すと聞て

花あやめ一夜にかれし求馬かな

俗士とは風雅の心なき人、それに誘はれて五月四日の日に吉岡求馬といふ其頃名代の俳優に面會した、所が其翌五日に早や死んだといふ事を聞いて此句を作るといふ前書。

花あやめは一夜に枯れてしまつた、昨日逢つた人は一夜に亡せてしまつた、と季節の物で比の體に叙したので、即ちア、花あやめの如き人であつたのに一夜に枯れて死んでしまつた求馬よ、といつたのである。前には人を悼むなどの時は多く節物を詠じて間接にほのめかし自然尊重を加へたやうな趣があつたが、此處は如何にも無造作に正面から名を呼んで悼んでゐる。それは俳優位な身分であるからで、敢て薄情といふではないが其人相應に悼みを述べたのである。又花あやめに求馬の名もよく似合つた配合で其の風采も想ひ遣られる。

留別

あやめ草足に結はむ草鞋の緒

留別の時が折からあやめさく季節であつた。そこで其あやめ草を足

に結て己が草鞋の緒の代りにして見やうかと無邪氣に興じたのである。柳の笠の緒の句と云ひ、芭蕉翁はよく個樣な手段を遣る人ぢや。

ちまき結ふ片手にはさむ額髪

額髪とは昔し女童などがしてゐた頭の形ちで古い面影ぢや。ちまきを結びつゝ片手にはこぼれかゝる額髪をはさむでゐる、といふので、其の人の容貌がよく畫き出されてゐる。此句は猿蓑集を作る時に物語り風の句がないからとて一句作つて入れたものぢやと或本に見えてゐる。美しい句ぢや。

病中自脉

髪生て容顔青し五月雨

病中に自分で脉を取つて見た時の句。髪が長く生えて顔色も青くなつてゐる折しも五月雨の時分ぢや、容

體のおとろへてゐる事わい、といふ歎息

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

瀬田の橋は湖水の排口の瀬田川に横はつてゐる長い橋ぢや。五月雨が降つて煙霧が湖山を隱してしまつてゐる、そこに獨り隱れぬものは瀬田の橋である、といふので、長い橋の景をよく叙し、湖邊の眺めも思ひやられ、大きい景色をあらはしてゐる。

阿武隈川の水源にて

五月雨は瀧降埋水むかさかな

奥州の阿武隈川の水源で作つたといふ前書。

五月雨がどん〳〵と盛んに降つてゐる、其傍らに瀧も滔々と落ちてゐる、併し五月雨の爲めに瀧は殆んど埋もれてしまつたやうに思はれ、水かさは其のあたり一面に增して盛んに流れてゆくといふのぢ

や。此句も亦雄大な景がよく現はれてゐる。五月雨が瀧を降り埋むとは如何にも形容が妙ぢや。

醫王寺にて

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

奥州の瀬の上といふ所にある寺で、佐藤庄司一家の石碑があり、義經の太刀や辨慶の笈など寶物に藏してゐるのぢや。

義經の太刀も辨慶の笈も今は五月祝ぢやから皆出して飾つたらよからう、紙幟を立てゝ祝ふ五月であるぞよ、といふやうな意ぢや。五月の祝ひは男子の爲めであるから義經主從の事を思ひ出して斯樣に打興じたのに過ぎぬ。又た紙幟といふのは此時代に田舍などで重もに立てた即ち質素な幟を言つたのであらう。

藤原中將さねかたの墳は道より一里はかり笠島といふ處に

ありといへどさみだれ降りつゝきてみちもいとあしけれはわりなく見過して通りぬ

笠しまはいつこ五月のぬかり道

中將藤原實方の墳は道から一里許這入つて笠島といふ處にあるさうぢやが、五月雨が降續いて道が頗る惡かつたから是非なく見ないで其儘に通り過ぎたといふ前書。

此句は實方朝臣が公卿の身で奥州に左遷せられて遂に死んだ事を思ひて笠島に一種の感を寄せ、其笠島は何處にあるか行つて見たいが、今通りつゝある所は五月のぬかり道で旅に行き惱める我れは心に任かせ難い、といふので又裏面には實方が都を離れて邊荒の地に沈淪轗軻して終つた事を追悼した心持もかすかにあらう。

中尊寺にて

○五月雨の降り殘してや光堂

中尊寺には昔し金で粧飾した金色堂といふがある。そこへ行つたのが前後五月雨の降る頃であつた。即ち「雨の中を金色堂に詣でた、すると其堂は五月雨の中に光つてゐるので、五月雨がこれだけは降り埋めずに殘してゐる、他の萬物は皆な五月雨化してゐるのに、獨り此堂のみ五月雨化せずに煌々としてゐるといつたのぢや」。降り殘すの言葉に拘泥して、實際此處だけ五月雨が降らずにゐたなど解かぬ方がよい。又金色堂は芭蕉翁時代にも既に金箔は剝落して居たらうに個樣に言つたのは例の詩的感興である。

最上川　二句

○五月雨をあつめて早し最上川

天地一面に降つてゐる其の五月雨を皆な集めて最上川に落すので爲

めに流れが急になつてゐる、といつたのぢや。總ての五月雨を集めて落すとは如何にも思ひ切つた言い方で、河流滔々の勢が眼に上ぼり、實に壯大雄渾なる句である。

風の香も南にちかし最上川

此川は南北に流れてゐると見え、又た芭蕉翁は此川に沿うて南へ向いて進みつゝあつたのである。それで風の香も南天に幾分か近づくやうぢや、想ふに旅程も餘程南の方へ來たらしい此最上川筋はと言つたのぢや。蓋し五月雨の晴れて涼しき風でも吹き來つた時の興であらう。又た風の香とあるのは鼻をうつやうな香氣でなく、風に暖氣を含むでゐる心持が匂ひありげに感ずるので所謂南風の薫するといふ類。

日のみちや葵かたふく五月雨

蜀葵の事でもあらう、其葵の花が雨中ながらも太陽の方へ首を傾けてゐる、と其けしきを面白く言つたのぢや。此の蜀葵の花は別段に日の方へ傾くものでないが、秋さく日まはりといふ葵の一種があるから、その花の日の方へまはるのを連想上より持つて來て興じたのであらう、新樣なのも詩人の情懷である。

信濃の洗馬

入梅晴れのわたくし雨や雲ちぎれ

信濃國の洗馬といふ名所での句。入梅の雨は早や晴れてゐる、併し未だ雲が所々にちぎれたやうに殘つてゐて、折々小雨がするといふ景色。私雨とは入梅が既に晴れて後の小雨であるから公然の雨らしくなく、何となくひそやかに降つてゐるのを呼んだので、頗る面白い言葉であるし、雲ちぎれも亦た妙

で、斯樣な景色は入梅頃に吾人の屢〻見る所で如何にも感がよい。

落栃舍頽破

さみたれや色紙へきたる壁の跡

去來の落栃舍が頽破してゐるとの前書。五月雨の時に落栃舍の堡を見ると嘗て張つてあつた色紙を剝がした跡が見える。昔しは美々しく住みなしたらんに今は此通り佗しくなつてゐる、と今昔を思ひ浮べて、矢張り其淋しい趣を賞玩した意もあるのぢや。五月雨については面白い見付け處。

五月雨や蠶煩ふ桑の畑

五月雨が降る、蠶を飼ふ時分で其蠶に病がついてゐる、一方には桑畑が見える、と何れも此五月雨中の有樣を叙して事物の關係がよく調和してゐる。尤も桑畑の中に蠶が病んで居るのではなく、唯だ漠

然と其時の心持を敍して場所を明白には言はなかつたのぢや。即ち五月雨が降りつゞくので蠶がわずらつてゐやう、桑畑は不相變雨中の景色ぢやといふ程の感想に過ぎぬ。

露川へ申侍る

さみたれに鴉の浮巢を見に行かむ

露川へ告げたとの前書。

鴉烏の巢が浮いてゐる頃である、此五月雨の中を冒して其浮巢を見に行かうぢやないか、と時にとつての興を敍したのじや。

さつき三十日の富士の思ひ出らるゝに

目にかゝる時や殊更ら五月富士

夏も六月に入れば全く雪解して青々とした富士になるから四季樣々の眺めの中でも五月末の富士は殊更に人の目を引き、即ち人の目にかゝる、といふ事。尤も句の表では汎く五月の富士としてあるが、前書に五月三十日に思ひ出でたとあるから句の意も自然に五月末と解して置いて好いのぢや。

五月の雨風しきりに落ちて、大井川水出て侍りけれは、とめられて島田に逗留す、如舟如竹なといふ人の許にありて二句

苣は未だ青葉ながらに茄子汁

五月雨が降り、風しきりに雨水を落して大井川の水が出て其爲め島田へ逗留した、其時に如舟だの如竹だのいふ人の家に居て二句作るといふ前書。

其時の饗應に苣をどうかしたのと茄子汁とがあつたと見える、時は五月であるから苣は追々長けて亡くなる頃ぢやのに未だ亡くなりき

らず青葉ながらにゐるし、又茄子の時候には早いのに既に茄子汁を喰つた、苣と云ひ、茄子汁と云ひ、誠に珍しき物ばかり頂戴して御馳走樣であつた、といふやうな意で、而して表面は唯だ客觀的に實物を打見てそれを愛で賞したことゝなつてゐるのぢや。

五月雨の雲吹おこせ大井川

五月雨が降つて大井川は滔々と流れ爲めに自分は止められてゐる。この五月雨の雲を吹落せよ、この大井川へ一時に吹落して流してしまへよと風に希望したのである。文字に拘泥すると五月雨の雲を吹落してくれと大井川に希望するやうであるが、吹くといふ字があるから風の字はなくとも風に希望するので、それを落す所を大井川へ落せといふたのである。力の强い句法で實に雄大にして爽快といふ可きぢや。

楢山や柴してもどる夏の雨

楢の木のある山へ入り、楢を、伐つて柴薪にして持ち歸る頃に夏の雨が降つてゐたといふので、元來五月雨は同じ夏でも分量多く長く續いて降る趣で、單に夏の雨といふのは雨量も少なく一時的にアッサリ降る淡く涼しい趣である。それで楢山から柴をかりて歸る里人には夏の雨が頗るよく調和した景色となつてゐる。

那須の光明寺にて

夏山に足駄を拜む首途かな

高足駄をはき諸所をかけまはつた役の行者に關係のあつた寺である。そこで時は夏の山である、そこに行者が遺物の足駄がある、それを拜み尙ほ旅から旅へ首途をするといつたのぢや。足駄を拜むがこゝの趣向で首途といふも其履物の緣から來てゐる。又足駄と夏山

もなんとなく詩的調和がある。拜むなどいへば行者を尊んだやうにもあるが、寧ろこゝではからかつたほどの心持ぢや。

夏山や杉に夕日の一里かね

夏山を越えつゝ夕方になつて傍らの杉に夕日がさしてゐる、一里ほどさきの方に入相の鐘が鳴るのが聞える。といふけしきぢや。一里位の遠さと思ひ一里鐘としたのであらうが、面白い言葉である。

夏山や紙すく里は飯時分

夏山がある、或里に紙をすいてゐる、其里は今ま飯をくふ時分らしいと途中の即吟であらう。

子珊亭にて

紫陽花や藪を小庭の別ざしき

藪があつて其傍らに紫陽花が咲いてゐる、其の紫陽花と藪とを庭として眺めるやうに別坐敷がしつらはれてゐる、といふ境地、小庭とは唯だ手輕く一寸とした庭といふ意で、蕭洒閑雅の趣が目に浮ぶ。

紫陽花や帷子時の薄淺黄

紫陽花や其紫陽花の花は人の帷子着る頃を薄淺黄色に咲いてゐる、といふだけの句。帷子の色も薄淺黄が多い處から此配合を取つたものであらう。心地よい句ぢや。

重行亭にて

珍らしや山を出羽の初茄子

重行の家で作つた句、出羽の國であつたと見える。重行の宅へ來る迄には出羽の事であかるら澤山に山を越してやつて來た、その山を出でて此處へ來ると初茄子を見た、山を越えて里の初茄子の御馳走、實に珍らしい事ぢや思ひもかけぬ事ではあるといふので、山を

出るといふのを出羽にかけ、羽を初に通ふやうにして音調もよく、無雜作に言つてゐる所は一寸興がある。

關の住素牛何かし大垣の旅店を訪はれ侍りしに、かの藤しろみさかといひけん花は宗祇のむかしに匂ひて

藤の實は俳諧にせむ花のあと

關といふ所に住み居る素牛何がしが自分の泊つてゐる大垣の旅宿を訪ねて來たのに、かの藤しろみ阪と宗祇の言つた其地の花は昔しの事を匂ひに立てゝそれを思ひ出されるといふ前書。

藤は折ふし花はなく實になつてゐる、此の實を俳諧の材料にして讀まうぢやないか、今ま花のないあとでは、といふので、即ち宗祇の時は花しろみ阪であつたが今は實だから實の俳諧をやらうといふに過ぎぬ。而して花の跡とは多少宗祇の遺蹟を慕ふ心持もあらう。

正成之像

鐵肝石心此人之情

撫子にかゝる涙や楠の露

楠正成の像を見ての賛で、鐵肝石心此人之情といふ情の字は誠とでもいふ意味だらうが、それを情の字を使用したのは少し穩當を缺いてゐるやうぢや。楠の木がある、其下に撫子の花が咲いてゐる、楠の露は其の撫子に落ちかゝつてゐる、其のつゆが恰も涙のかゝるやうに撫子を霑してゐるといふ客觀の景色で、楠公子別れの事を咏ずる爲めに涙やの字を用ひてゐるのぢや。又楠の木を父に比し撫子を子の正行に比してゐることは云ふまでもない。

醉て寢ん撫子さける石の上

撫子が咲いてゐる、其傍らに石がある、自分は醉うてアノ撫子の咲

いてゐる所の石の上へ寢やうかのう、といふて打興じたのぢや。石の上に撫子の咲いてゐるのではない。言葉のゆとりをつけてよく解せねばならぬ。

高舘にて

○夏草やつはものどもか夢のあと

奥州の高舘で、嘗て義經が居たのを泰衡が亡ぼした所ぢや。

其の昔しを偲びて、今まは夏草が茫々と茂つてゐるのみぢや、城のあとも見えず又た義經を始とし辨慶とか四天王とかいつたつはものも居ぬ。唯だ此夏草のみが其つはものの共の夢のやうな生涯を送つた跡の名殘となりて茂つてゐるのみぢや、といつたのぢや。又夢の一字は遠き昔し種々なる恩仇で戰つた軍兵も要するに一場の夢であつたといふ意も見える。誦して餘韻限りなく千百言を連ねた懷古の漢詩にも勝る感がある。

殺生石にて

石の香や夏草赤く露暑し

那須野の殺生石といふ毒石の處で作つた句。

殺生石は香を立てゝゐる、其の石の傍らは夏草の花が赤く、それに置ける露も暑さうに見受けられるといふので、是れは彼の狐の恨のほむらを思ひ出でて斯樣に一々客觀の景物を叙寫したのである。それと明言せずに此地は魔所であつて石は毒氣を含んでゐて近くべからずといふ心持を自然と現はしてゐるのぢや。

遠淺や夏の日の出の舟こゝろ

海濱は遠淺である、夏の日は今ま出ようとしてゐる、人は舟に乘つて出帆せんとしつゝある、此場合の舟の乘り心よ、といふので、如

何にも涼しげに且つ勇ましげに、心地の浮き〳〵してゐる趣が感せられる。

清風亭　二句

行末は誰か肌ふれむ紅の花

庭に紅の花が咲いてゐるのを見て、此紅の花は絹などを染め、其絹は女の着物の裏などとなるのぢやが、行末はそれが誰れの肌に觸れることであらうか、といふので紅の花のあいらしく美しくうひ〳〵しいより更に人間の美人まで想ひ遣り結局其花を賞したのぢや。

眉掃を俤にして紅の花

眉掃は刷毛で、化粧する時に用ふる道具、紅の花を見れば何となく眉掃が俤となつてちら〳〵と目の前に立つといふので、眉掃の俤とは即ち美人が化粧しつゝある其を想ひ遣つて婉曲に言ひ現はしたので

あらう。芭蕉翁は中々艶な想像も出來て油斷のならぬ老人ぢや。

巳百亭

やこりせむ藜の杖になる日まで

今は藜の生ひ茂る頃であるが、此の藜が仲び立つて其の幹の杖となる頃まで此の亭に宿りたいものぢやと言つたので他の意はない。

落梧のぬし幼きものを失ひける事を悼みて

もろき人にたとへん花も夏野かな

落梧といふ人が小供を失つた其の悼句。

脆くも亡くなつた稚き人に何の花が似てゐるかと見渡すに頃しも夏野であつて草のみ生ひ茂り何も似てゐる花がない、其人既に亡し又た比す可き花もなく重ね〴〵も悲しいといふたのである。花も無いと夏野とはかけ言葉になつてゐる。

秣負ふ人をしをりの夏野哉

夏野の草のいや茂りて行く道もわかぬ許りであるが、折ふし秣を負うた人がゆくので、其人を道の案内即ちしをりとして此野を行きつつあるといつたので、時に取つて面白いつかまへ處である。

うき我をさひしからせよ閑古鳥

閑古鳥は深山などに多くなく淋しい鳥ぢや。

自分は旅に疲れて物うれはしい、其上に閑古鳥が鳴いてゐて一層淋しいさらぬだにうき我を更に淋しがらせることよ、いづれの途うき我なればサア勝手に淋しがらせよ閑古鳥、と言つたのぢや。うきとか淋しいとか其れを厭ふ如くいつて其實却つて自ら興じ自ら樂む處は即ち俗人の情と詩人の情との異なる點。

能なしの眠たし我をきやう〳〵し

行々子とは吉原雀といふ小鳥で、さはがしく鳴き立て群がり遊ぶ鳥ぢや。

何の仕事もなく、何の能もない自分は夏の頃なれば眠たい、この自分を的に騒がしく鳴き立てる、誠に仰々しい、吉原雀ぢやといふので、一は閑にして一は忙なる二ッを取あはせて詩興を構成したのである。勿論是も行々子を惡むのでなく却つて其聲を樂み玩んでゐるのぢや。

稲葉山にて

撞鐘もひくくやうなり蟬の聲

岐阜の東の山で昔し城のあつたところ。山に木でも茂つてゐたか蟬が頻りと鳴く、其聲があまりはげしいので撞鐘も餘響を受けて音を發するかのやうに思はれるといふので一寸奇想ぢや。そこに寺もあ

るのであらう。

立石寺にて

しつかさや岩にしみ入せみの聲

靜かなことぢや、蟬の聲が岩の中へ直ちに浸み入るかのやうに思はれる、といふので、山中など靜かな處では如何にも斯樣な感のあるものである。岩にしみ入るとは是れも形容が面白い。

無常迅速

やかて死ぬけしきは見えず蟬の聲

生死は常なく其來るのが迅速ぢやといふ佛敎の心を讀んだ句。蟬は生命の短かいものぢや、併し其短かいといふことに感じてゐる有樣もなく元氣よく得意らしく啼いてゐるアノ蟬の聲よ、といつたので、裏には題の意の無常迅速をほのめかし、蟬のみならず一切の生類殊

に人間までが全く油斷でゐると歎じてゐる。此句は題が題であるか か理性を主としてゐて詩趣は殆ど零に歸したのは詮方がない。

盤齋うしろむきの像

世の中をうしろになして山里にそむき果てゝもすみそめの袖

といふに

團扇もてあふかむ人のうしろ向

盤齋といふ人の後向の像があつて、世の中を後ろにし即ち世を遯れて山里へ赴き、總ての事に打ちそむき終ふせても住んでゐることよ此墨染の衣を着た生涯はといふ題詞があるに對して作句したといふ前書。

句は團扇を持ちて後ろむきした人を煽がうといふのみで輕ろく戯れてゐる。裏面には世の中を超脫した其人を賞歎敬服して打仰ぐとい

ふ意を含むでゐるのぢや。

奇香亭にて

皷子花の短夜眠るひるねかな

皷子花はッ、ミ草で、小さい白い花のさく草。その皷子花が短夜に寢たらいで晝間をねむつてゐるといたので、其花のさゝやかに目立たず又た無邪氣な形容である。短夜を眠るとは其短夜を眠るのでなく、短夜の故を以て晝も眠るといふことで、裏面には夫子自身か晝も寢て遊んで氣樂にしてゐるといふ所を鼓草に寄せて咏じたのであらう。

ひるかほに米つき涼むあはれなり

晝顔が咲いてゐる、傍に米つき男が杵を置いて休みつゝ涼んでゐる、といふ景色の句で、それが作者の頭にあはれと感じたので、あはれ

なりと結むだのである。あはれの語は憐む意のみに用ふるのでなく、風情があるといふやうに古來から使用し來つてゐるが、こゝも亦た其邊の意が見える。畫にもしたき景色で面白い句ぢや。

子どもらよ晝顔さきぬ瓜むかん

午過ぎになつた、晝顔がさいてゐる、瓜でもむいで喰はうぢやないか小供等よといふので、午過といふのを晝貌さきぬといつて詩的景趣を添へたのぢや。如何にも呑氣らしく見えて言葉も小供に對して言ふやうに無邪氣に出來てゐる。

平田の李由のもとへ文の音信に

ひるかほに晝寢せうもの床の山

床の山とは地名で李由の地方江州犬上郡にあるさうな。それで晝顔がさく其晝時分には晝寢をしたいものぢや其床の山のあたりで、と

言つて、李由にお前の處へ行つてゆつくりと遊びたいと申し遣はしたのである。床の山は寢るといふ緣から用ひられてゐる

夕かほや醉て顏出す窓の穴

夕顏がさいた。酒に醉うて其顏を窓の穴から出すと言ふのぢや。窓の穴とは小さな窓だから左樣に言つたので、窓に破れた穴のあるわけではない。夕顏の花に醉顏を出した處など一寸面白く、窓の穴と言つたのも善く佗び人の境遇をあらはしてゐる。

ゆふ顏に干瓢むいて遊ひけり

ゆふ顏のさく頃に、職業の爲めでなく只遊び半分に干瓢をむいで見たといふので、夕ぐれの氣樂な樣が見られる。夕顏と干瓢と同種額であるから配合としたといふやうな理窟は禁物。

住ける人の外にかくれて藤生ひしける古跡を訪て

瓜つくる君かあれなと夕すゝみ

これは嘗て住居して居た人の家を尋ねると他へ身を隱してしまつて唯だ藤が茂つてゐるのみであつた、といふ前書。

古跡といふ語は。多少不穩當なやうぢや。

瓜を作つてこゝに住みなして居た君があつて共に夕すゞみをしたら善からうに、といふので、即ち瓜を作るやうな洒脫な友人を今もあれかしと慕ひ、折節夕すゞみの頃であつたからそれを偕にしたいといふ意を夕すゝみと叙したのぢや。あれなとはあれなと思ふの略語。西行の歌に、夕涼み君かあれなとおもはゆる哉とある由。

河野松波宅にて古き長瓢に瓜の花をいけて、下に無絃の琵琶を置いて花生より落つる雫を撥面にうけたり

瓜の花しつくいかなるわすれ草

松波といふ人の宅で、古き長い瓢に瓜の花をいけて其下に絃のない琵琶を置き、花生から落ちる雫が丁度撥面に落ちてゐたといふ前書、受けたりは落ちた雫が恰も撥面へかゝつたのを斯くいつたのぢや。

瓜の花の雫には如何樣な忘草が生えるであらうか、其忘草を思ひ遣れば心床しい、といふ意で、忘草の裏面には隱逸の人の世を忘れる意を含み、又た淵明の無絃琴を撫してゐた故事を思ひ合はせて、現在の無絃琵琶の上へ落ちた花の雫に勿體をつけて打興じたのである。

落梧なにかしの招きに應して稻葉山の松の下納涼して長途のうれひを慰むほと

山かけや身をやしなはん瓜はたけ

長途のうれひとは長く旅をしたそのつかれといふ意で、それを養ひ慰める其時にといふ前書。

山かけで長途につかれた此身を養はうよ瓜ばたけがある山かげで、といつたのぢや。瓜が餘程すきであッたと見えていつも瓜については御機嫌が好い。

花と實と一度に瓜のさかりかな

花が咲いてゐる、實も熟してゐる、花と實と一時に瓜が盛りで居ることよ、と瓜其物につき、夏景を咏歎したので、一度にといふのが此句着想の主眼となつてゐる。

幻住庵にこもれる頃

夕にも朝にもつかす瓜の花

瓜の花はわけもなく日一ぱい咲いてゐて、夕方の花ともつかず、又た朝の花ともせられぬ、と言つたので、其無意味にひねもす咲いて

夕顔や朝顔のやうな格段なる姿格もないと輕ろく興じたのである。

初眞桑たてにやわらむ輪にやせむ

初眞桑瓜を得た、いざこれを喰はう、珍らしいのでうれしくて堪らぬ、さて如何樣にして喰つたものであらうか、縱に割らうか、横に輪切にして喰はうかと興じたので、初といふ心持をよくあらはし、珍重する樣が目に見えるやうぢや。

去來か別墅にて

朝露によこれて涼し瓜の泥

夏の朝に畑へ行つて見ると、瓜畑があつて朝露がおりてゐる、其瓜の尻あたりに泥がついてよごれてゐる、其の露と泥とのついてゐるのを涼しく感じたといふので、即ち朝露がおりてゐる場合にはよごれたのが却て涼しく感ぜられる、瓜についてゐる泥即ち泥だらけの瓜よ、といふやうな意味である。又た泥がついては穢なく感じ涼しく思ふはれぬといふ人もあらうが、ソコ等が詩的感想で泥がついてゐてこそ趣もあれ、たゞの瓜では平々凡々になつて、こゝには何等の趣味も起し得ぬのぢや。

柳行李片荷は涼しはつ眞桑

或人間が荷を擔つて行く、其の片荷は柳行李で片荷には眞桑瓜、其のさまが如何にも涼しげに感ずるといふので、表面は其ありさまを打見て客觀的のけしきを叙し、又裏面の主觀には其人の心持も涼しからうとうたつたのである。

元道に對して

我に似な一に割し眞桑瓜

元道といふ人が御馳走に桑瓜でも出したのであらう、そこで其れに

つき戯れて、瓜を二ッに割つたやうなといふ諺がある所から、我れに君は似てはならぬぞ、二ッに割つた眞桑瓜のやうに似てはならぬぞと興じたのぢや。

瓜の皮むいた處や蓮臺野

蓮臺野へ行つた所が、そこに瓜の皮が落ち散つてゐたのを見ての即興であらう、即ち野の中に瓜の皮が落ちてゐる此處は誰れか瓜を剝いて喰つた處ぢやな、こんな氣の晴れ〴〵とした蓮臺野の中で、と興じたのであるらしい。或いは自分が嘗て瓜をむいて喰つた處ぢやといふやうにも解せられるが、それよりも前の客觀の事を其儘に興じたとする方が趣味があらう。或いは故事でもあるの歟。

夏の夜や崩れてあけし冷し物

寒天か何か、何んでも夏の頃よくする冷し物を翌日喰はうと思つてゐたら、それが崩れた形ちとなつてしまつて而して夏の夜があけた、といふので、崩れてあけしと綴つた處は何となく夏の夜の果敢なき趣を含んでゐる。

さゝれ蟹足這ひのぼる清水かな

清水が湧いてゐる處へゆくと、小さな蟹が居て、それが自分の足へ這ひ上ぼつて來たといふので、一寸涼しげな心持の好い句ぢや。

岐阜山にて

城跡や古井の清水先問はむ

岐阜は織田信長の城跡のあるところ、そこに古い井の清水があるのと見える。そこで此句は城跡へ來たが聞き及ぶ所では古井の清水があるさうな、それを先づたづね問ひたいものぢや、といふので、裏面には憑弔の意をもふくみ、古井の清水により更らに古人を偲ばれ

るといふのぢや。

那須の温泉明神相殿に八幡宮を遷し奉りて両神一方に拜まれ玉ふ

湯を結ふちかひも同し石清水

那須の温泉明神といふ神様の相殿即ち合祀として石清水八幡宮を遷し奉りて二つの神様が一方即ち一ッ並びに拜まれてゐらるゝといふ前書。

湯を結びて打ち拜む此温泉明神の御誓ひは同じく又石清水八幡宮の御誓ひである、即ち一度禮拜歸依すれば二柱の神様の御擁護を蒙ることになるのぢや、さても有り難いと言ふので、温泉と石清水とのかけ合はせが重もなる趣向であらう。

結ふよりはや齒にひゝく清水哉

清水を口に入れると齒にしみ込むやうに冷たいのを誇張して、掬むだ時から早や齒にしみる心持がする此冷たい〳〵清水かなと興じたのぢや。

須磨　二句

月を見ても物足らはすや須磨の夏

月を見ても物足らはぬ心持のする事ぢや須磨の夏にはと歎じたので、此の名所の月を見ても秋の月の如くならず何處となく月色が物足らぬやうに感ずると言ふ意ぢや。裏面には矢張り須磨に於ける歴史に就いて興亡盛衰定めなく不如意の人生であるといふ感慨もよせたらしい。

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

此句も亦た前の句と殆んど同樣の事を言葉をかへて言つて見たに過

ぎぬ。即ち月はあるけれど主人は留守のやうで何となく調子の抜けた心持ぢや須磨の夏は、と言つたので、是れも多少平家が西海へ落ちて行つた事などに感をよせた處もあらうか。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

明石で夜る泊つた時の句で、此邊では蛸を取る、それは壺を海へ沈めて置いて、或る時間に引上げると其中に蛸が自分の巣だと思つて這入つてゐる、その壺を蛸壺といふのぢや。そこで、蛸は蛸壺の中で今ま押へられるとも知らず巣だと思つて果敢なき夢をむすんでゐるであらうよ此の夏の月がさす海の底に、といつたのである。而して蛸が壺の中で一夜のゆめをむすぶといふ裏面には自分も夏の月の下に旅寢して短か夜のはかない夢を結ぶことよ、と歎じたのぢや。

又一歩を進めて云はゞ此明石あたりの歴史などにも思ひよせて、古來數多の人物の一生も果敢ない夢を見たに過ぎぬとほのめかしてゐるのぢや。

手を打てば衾にあくる夏の月

手を打てば音が衾にひゞく、其衾のひゞきの爲めに夜は明けてしまふ斯かる短い夜に出る夏の月よといつたので、夏の夜の無造作に手輕くあけてしまふ樣を面白く叙してゐる。

夏の夜や衾にあくる下駄の音

前の句と同じ意を他の事で言つたに過ぎぬ。夏の夜が下駄のカラコロと響く衾にわけもなくあけてしまふ、といふのである。

夏の月御油より出でて赤阪や

御油と赤阪とは何れも東海道の驛の名で、五十三次に於て宿と宿の

間の尤も短い距離の場所ぢや。そこで此句は夏の月の下に旅をして御油を立出でゝ今赤坂へかゝつて居るといふので、斯くいつた言外に夜明になつてしまつた、さても短い夜の夏の月よといふ意もあるのぢや。まさか夏の夜だとて御油と赤阪との間で明けてしまふ筈はないが、それを例の詩的に誇張して極端に言ひ切つたので、夏の月の下に旅しつゝある樣も思ひやられて面白い句ぢや。又や止めの言葉が人を浮きたゝしめて實地に臨む心地がする。

晋の淵明をうらやむ

窓なりに晝寢の臺やたかむしろ

陶淵明をうらやむだので、淵明は隱逸の士で優遊自適して世を終つた男ぢや。たかむしろとは簟の事で竹で作つた敷物ぢや。其處で窓の處へ其のたかむしろを晝寢の爲めにと横たへ敷いて自分は安樂に

寢ころんだといふので、淵明が北窓に高臥したといふ故事よりそれを慕つて自分も其眞似をした心持である。晝寢の臺と故さらにいつたのは支那人は寢臺だから自分は其寢臺として即ち寢臺の代りとして簟を用ひたといふのであらう。

秋雅主人の佳景に對す

山も庭もうこき入るなり夏さしき

秋雅といふ人の座敷から向ふを見ると、前の山も、庭のけしきも、廣いながめであつて、それが夏の座敷に動いて這入つ來た、といふので即ち夏の涼しい風が開け放した夏座敷へ吹込んで、その風の爲め眼前の草木などが打ちそよぐのを直ちに向ふの山も庭も皆な動いて座敷へ這入つて來たと誇張したのぢや。動き入るとばかりで風があるといふ想像を起させるのは穴勝ち無理でない。夏座敷の涼風の

景が目に浮ぶやうで思ひ切つた膽力のある句である。

井狩氏水樓

世の夏や湖水にうかふ波の上

世の夏やとは世の中は夏で暑い節ぢやといふたの、湖水にうかぶ浪の上とは、湖水の浪の上に浮ぶといふのを言葉を上下に變化させたのぢや。世の中は夏季で暑い頃ぢやが、此の水樓は湖水の波の上に浮びて、涼風一陣湖上の涼しさを占得してゐるといふたのである。湖水にうかぶ浪の上とは身體が浮んでゐるのか但しは湖水の波の上へ舟をうけたのか言葉上は判然せぬが、前書に對しては水樓が浮んでゐると見た方がよい。又た水樓が浮ぶわけはないが其處は波の上に浮んでゐるやうぢやといふのを浮んでゐると誇張して言切つたのぢや。漢詩では此位の誇張は殆ど常語ぢや。

名にし負へる鵜飼といふものを見侍らんと、暮かけて誘ひ申されしに、人々稲葉山の木かけに席をまうけ盃をあけて

又たくひなからの川の鮎膾

名にし負ふ岐阜の長良川の鵜飼を見やうと夕方から誘ひ出されて人人と共に稲葉山の木蔭に席をまうけて、川へ鵜飼舟の來るのを待ちながら盃をあげて酒をのむ、といふ前書。

又た比す可き物のないゝ下物ぢや、長良川の鮎の膾はといふので、其時の御馳走のうまかつたのを其儘に興じたのぢや。比ひなきを長良川のなにかけて言つてゐる。餘り感心する句でもない。

うふねも通りすくる程に歸るとて

おもしろうてやかて悲しき鵜舟かな

稲葉山の松かけで見てゐると、鵜舟が其前を通りすぎて下流へ下つ

てしまつたほどに、もう歸らうといふ事に成つてといふ前書。

今ま篝火をたいて勇ましげに通つた鵜舟の樣は實に壯觀で面白かつたが、それもやがて通りすぎて篝火も見えずなり、川面は又たもとの闇の寂寞にかへつた、おもしろかつて忽ち淋しくなる鵜舟であるかなと光景の瞬時に轉變した有樣を叙したので鵜舟のさまをよく現してゐる。鵜飼の謠曲なども或いは思ひ合はせて作つたのかも知れぬ。兎に角に有情の句ぢや。

本間主馬が邸に招かれしに、太夫か家名を稱して二句

ひら〳〵とあくる扇や雲の峰

本間主馬といふ人の邸に招かれた、此主馬は能樂の太夫で家名も世に聞えてゐるから。それをたゝへ譽めて作るといふ前書。

能樂の事であるから、扇をあげて舞ふた、その扇をひら〳〵とあげる、をりしも向ふには雲の峯が立つて居たといふので、舞扇と雲の峯とは配合が意表で面白い。又能を舞うてゐる、向ふには雲の峯がゆる〳〵と出てゐるといふ景色も趣がある。裏面には即ち名家を雲の峯に比し扇の如く家運の開けてゐるといふ賛辭ぢや。

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

これも右の能樂の句で、能役者が面を被つて出て來た、會〻能舞臺の傍らに蓮の花が咲いて居たが面を被つてゐる役者が不圖其方へ向いて目をかよはした、其目をかよはしたのを蓮の香の爲めぢやと推定して斯樣にいつたのである。而して面の鼻とは蓮の香を面の鼻の穴より受ける處から云ひ添へたのであらう。目と云つて又鼻と云ふなど細かく其態度を寫してはゐるが叙寫が多少錯雜してゐて難解の句といふことを免れぬ。

枝なくて世にかゝはらぬ蓮かな

蓮の花には枝がない、一本の莖に葉が出て、一本の莖に花がさく、其の樣が實に世にかゝはらぬやうなと蓮を擬人的に咏じたのぢや。元來枝などあるから物事は葛藤が起る、其の葛藤の基たる枝のない所が蓮はよいと言つたので、蓮のスッパリとして淸い所を見せたのぢや。

雲の峯いくつくつれて月の山

夕暮の空を眺めてゐると雲の峯が横たはつてゐたが其内一つが崩れ二つが崩れ段々と崩れてしまつて月さす實際の山ばかりとなつた、といふので、言葉上はアノ月の山は雲の峯が幾つ位崩れて出來たのであらうかといふやうな心持もある。其の晩の凉しい景色が目に浮ぶ。

六月や峯に雲おくあらし山

六月やは時候、その六月に嵐山を見ると、峯には雲を置いてゐた、春は花であつたが今は雲に換はつてゐると暗につぶやいたので、花と雲と似通つてゐる所から言つたとは云へ少し理窟らしくてよい感じがせぬ。

水無月や鯛はあれども鹽鯨

水無月頃の肴は鯛はあれど寧ろ鹽鯨の方が珍重ぢやといつたに過ぎぬ。鯛は固よりいつも好い、併し夏の暑い頃は鹽鯨の方がアッサリとしてゐて調和するやうに思はれるとの意で、實際吾々も左樣な感がある。即興であらう。

淸瀧や波にちり込む靑松葉

淸瀧は京都の西北の郊外、山間の淸流ぢや。其波うつてゐる水に靑

い松葉が散り込んだ、といふので折節常盤木の落葉する頃だから其景を詠じたものぢや。清流に青松葉の散り込んで漂ふ趣は實によい感じがする。

水無月はふく病やみの暑さかな

ふく病やみとは腹がふくれる病氣であらう、水無月の頃は此の病を惱む如き暑さであるといふので、それを直ちに腹病やみの暑さといつたのは詩的修辭である。又此下十二字は腹病をやめる人の殊に感ずる暑さぢやといふことにも解けるが、さうすると芭蕉翁自身が此病に罹つてゐたものとなるのである。

かたられぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿で袂をぬらした、其事柄は人に語り聞かされぬ秘密の事ぢやといふので、湯殿で出來た戀らしく、主人公は乙女、袂ぬらすとは濡

事の意と見られる。芭蕉翁としてはあまりになまめかしく一寸受取れぬ句ぢやが、或いは一杯きげんで戯れに詠んだのかもしれぬ。季は行水といふ夏の季であらう。情事も斯樣に言ふと品致がついて厭味がない。

附記　或る解に湯殿は湯殿山ぢやといつてある。左すれば貴い御山で此戯れた詩人は實に罰あたりなる哉。呵々。

松風の落葉か水の音涼し

水の音が實に涼しい松風が吹いてゐる、アノ涼しい水の音は、上に吹いてゐる松風の落葉が水に落ちる音であるかや、と水の音を聞き松風の音をきゝ想像して涼しげな感じを叙したのである。併し松風の落葉とは言葉を少しあやつり過ぎたやうで、又たかと疑つた所も面白くないやうに思ふ。

石川丈山の像

風かほる羽織は襟もつくろはず

京都の東北なる詩仙堂に居た石川丈山の像を見ての句。風が吹き來て我れにかほる、此凉しい時には着てゐる羽織の襟もつくろはずにくつろいでゐる、といふ意で石川丈山の世をさけて清い生活をしてゐたのを思ひやりて其像の賛としたのである。裏面には丈山が富貴權勢を忘却して隱逸の節を遂げたのを慕ひ。其洒々然として襟もつくろはず貴人に見ゆる風體でゐぬといふ事を暗に叙したものらしい。

書音

辨慶は夏もかみこの羽織かな

誰れかにやる音信の書の端に書きつけた句といふ前書ぢや。

辨慶は暑い夏も紙衣の羽織を着てゐると言つたので、自分もこのやうに世に伴はぬ武骨者であるといふ意を含めたのであらう。これ亦た詩人が一面の情懷である。又た辨慶の時代には紙衣などいふものはなかるべく、全く時代ちがひであるのに、その時代ちがひの紙衣を辨慶に着せた處も詩人の興で、こゝらに專ら滑稽の意をも含むでゐる。

一本、

石清水瀧本坊法印の許へ或在家より刀豆一籠送りければ其返しに辨慶が七ッ道具の刀豆は日本一のかうのもの哉と扨〳〵おもしろき狂歌中〳〵およびがたき事におもひ侍るしかし我もせめて一句をせむとて狂歌をもて

と前書あり。して見れば前解芭蕉翁自身に比擬したいとふ造は此句

作の本意でなかつた。

小倉山常寂寺にて

松杉をほめてや風のかはる音

風のかほつて音がする、それは此境内の松や杉の木立をほめてゐるやうに思はれる。といつたのである。ほめてや風の音かはるとは言葉に多少厭味があつて面白くない句ぢや。是等も例の或る派の粉本、尤松杉といふことは定家の歌にもあるさうな。

游力亭　二句

さゝなみや風の薫りの相拍子

游力亭は湖邊にあつたものと見える。湖面にさゝ波が立つ、其上を風が薫ずる其の風が恰かもさゝ波に對して奏樂の相拍子のやうぢやといふので、波の音と風の音とを配合して、如何にも涼しげな樣を現はしたのである。風薫るとは實際風に鼻をうつ匂ひのあるのでなく、夏南から吹く風の何となく薫りある如く思はれるのをいふのぢや。

湖や暑さを惜む雲の峯

湖上一面は涼風が吹き向ふに雲の峯が立つてゐるといふ客觀の景色に過ぎぬが、それを修辭上雲の峯を擬人的にして、湖面には水も天も涼氣みち〳〵て殆んど夏の暑さを打消してしまつてゐる、斯く暑さのなくなつてゐるのに獨り雲の峯のみが暑さうにむら立つて暑さのなくなるのを惜んでゐるかのやうに見える、といつたのである。

蛤の口しめてゐる暑さかな

暑い時に蛤を見ると口をしめ即ち口を閉ぢてゐた、といふに止まつてゐるが、口を閉ぢた蛤と暑さとは面白い配合で、何となく感じがあ

る。暑さの故に蛤が口を閉ぢてゐるといふのぢやない、蛤の口を閉ぢてゐるのを見た、其時が甚だ暑かつたといふのぢや。

破風口に日かけや弱る夕すゝみ

屋根の横手にある破風の處に西日があたつてゐるのが弱々しい、其時分に自分は夕すゞみをしたといふので、即ち夕すゞみに出て家居にあたる西日を見た客觀的即興である。

風瀑餞別

わすれすは小夜の中山にて涼め

風瀑といふ人が旅をするのに就て餞別にやつた句といふ前書ぢや。そこでお前はこれより旅に出るのぢやが、若し忘れなかつたらば小夜の中山で涼みをしろといふので、東海道中の名所小夜の中山あたりは嘸ぞ涼しい事であらうと輕く言つたのぢや。にて涼めの下五字が面白い。又た例の西行法師の風雅を慕へといふ意もかすかにあらはしてゐる。

千子かみまかりけるを聞きて、美濃國より去來か方へ申つかはし侍りける

なき人の小袖も今や土用干

千子は去來の妹とか、それの死んだのを聞いて美濃國から京都なる去來へ言つてやるといふ前書。

亡くなつた人の小袖も今や土用干となつてゐるであらう、悲しい事ぢやと言つたので、人情詩思双全の句ぢや。

十八樓記

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

十八樓は美濃國長良川に沿うて建てられた賀島氏の家で、芭蕉翁の

記に「かの瀟湘の八ッの眺め西湖の十の境も涼風一味のうちに思ひためたり」云々とあつて十八樓と名けて此の句を書きつけたのぢや。そこで此あたり目に見る限りの景色はアレもコレも何れも皆な涼しい事ぢやと言つたのである。チト茫漠とした。叙寫であるが、斯樣な概括的の觀念には却つて此叙寫が適するのである。

清風亭

涼しさを我やこにして寐まるなり

此宅は實に涼しい、其の涼しいのを自分の宿と思つて落ついて快くねるのぢやといふので、表面は亭の涼さしを賞し、裏面には主人の待遇を謝するの意を含むでゐる。

皿鉢もほのかに闇の霄すゝみ

晝すぎ頃から酒でも飲んでゐたのであらう、日も夕ぐれになつて座敷にとりちらした皿や鉢などもほのかに見える、未だ月も出ず、灯もともさず、闇の中で宵涼みをする、といつたのである。皿鉢のほのかに見ゆるとは夕暮の宴席を言ひ現して面白く、全句何となく涼しい氣持がして、夕ぐれより段々と夜にかゝる涼しい座敷が思ひ遣られて最も心地の好い句である。

羽黑山にて

有がたや雪を薫らす南谷

羽前の羽黑山で、佛がある深い御山ぢや。

深い山であるから、谷底には雪があつたのであらう、又た其時に必ず無くても山の深いのを雪ありとして咏じたので、今ま風の薫るのは南谷の底に殘つてゐる雪が薫るのぢや、誠に難有い靈場であると言つのである。雪が薫ると誇張して山の深い事と風の涼しいのがよ

く現れた。

すゝしさやほの三日月の羽黑山

涼しい事である三日月のほの見ゆる羽黑山よ、といふので、ほの見ゆるに三日月をかけ言葉にしてゐる。

文鱗子出山の像を贈られけれは

南も佛草の臺も涼しかれ

文鱗といふ人が、釋迦の悟を開いて山を出る其時の像を贈つてくれたからといふ前書。

南もは南無と同じこと、そこで南無釋迦佛よ蓮の臺でなくとも此草の臺へも涼しく御安座下だされ、といふので、草の臺は佗びしき草庵を戯れに呼んだ名。出山の像をお迎へ申して謙遜もし觀喜もする心持である。

新莊風流亭

水のおく氷室尋る柳かな

水の奥とはそこに川が流れてゐて其水源の事、氷室は實際あつたか無かつたか兎に角それを有りとして、此川水を奥へ〳〵と氷室を尋ねて行けば柳があつた、そこで柳かなといつたのである。前書風流亭の位地風景も此句で想像せらるゝやうぢや。

袖の浦の眺望

あつみ山や吹浦かけて夕すゝみ

あつみ山から吹浦へかけて廣い景色を見渡しながら夕すゞみをする、心地よい事かなといふので、如何にも大きな景色と涼しさうな心持とを言ひ盡してゐる。あつみ山やと六字にしたのも此句に取つて貫目をつけたのぢや。初心者は字餘りの用法として心得て置かね

ばならぬ。

寺島彦介亭

暑さ日を海に入れたり最上川

最上川が夏の日も漫々と流れて海に這入つてゐる。其光景を理想的に言ひ現はしたので、最上川が此暑い夏の日を押し流して遂に海に入れてしまつた。ヤットこれで涼しくなるのぢや。といつて、川下に海があつてそれへ夏の夕日が落ちかゝつて行く有樣を如何にも雄大に名狀してゐる。又た入れけりと言はずに入れたりとしたので語尾が強くなつて餘勢を帶びるやうになつた。斯樣に大きく強い叙寫には語調も隨て強くする必要があるから初心者は注意して擇ぶ所をしらねばならぬ。

象潟や雨に西施かねふの花

象潟の旅中でねむの花が咲いてゐて雨も降つてゐた、ねむの花より眠るといふ事を連想して其花を美人に擬し、雨中のねむの花は恰も西施が眠つてゐる如くぢやといふのを雨に西施が眠る其のねむの花といつたのである。

汐越や鶴脛ぬれて海涼し

濱邊に鶴が立つて居る、波が打つてくる、鶴の脛がそれにぬれる、其の海邊の景が如何にも涼しさうなといふのを直ちに海涼しと言つたのぢや。且つ濱邊に居る鶴の脛の波に濡れる有樣こそ最も涼しさうなのを鶴涼しと言はず海涼しといふ處が景を擴張する詩的の手段である。又汐越は地名ぢやが、鶴の脛のぬれるのに多少緣もあるやうぢや。

ささかたの、櫻は波にうつもれて、花の上こくあまのつり

ふね

花の上こくとよみたまひけん古き櫻も、いまた蚶滿寺のしりへに殘りて、陰波をひたせる夕くれのさま、いと涼しけれは

西行法師

夕晴や佐くらに涼む波の花

前書西行法師の歌は、櫻が波に埋れて花の上を舟がゆくなど如何にも細工に失してゐる歌ぢや。併し芭蕉翁は一面に詩的の趣味を知りながら、この歌なども西行を尊敬する餘り矢張善いと思つたのであらう、それで其歌によまれた櫻も今に殘つてゐて、其のかげの波にひたされてゐる夕方の景色が如何にも涼しかつたからといふ前書。夕晴がして氣持がよい、それで櫻に涼んだ、其櫻の影を浸たせる波の花に、といふので、即ち波の白く立つのを花に見立て其波の花を

櫻の花にかけて斯樣にもぢつた處如何にも細工に失してゐる。今少し言ひ現はし方もあつたらうに西行の歌にかぶれて餘りに巧を弄したのは此句の失敗に歸した所以ぢや。

小鯛さす柳涼しや海士か軒

或る海士の家の軒端に柳の枝があつてそれに小鯛がさしてある、其趣が如何にもじ涼しといふのを斯樣に歌つたので、尤も柳のみならず。海士が家もさした小鯛も涼しいといふ意である。

川中の根木によころふすくみかな

川中に根木がある、其上へ横に寢ころんで涼みをすると言つたのちや。根木とは十分に分からぬが木を組んだ川床又は棧橋見たやうなものであらう。兎角意味は右に解した通り。

四條の河原納涼とて夕月夜のころより、有明過る頃まて、

川中に床を並へて、夜すから酒のみ物くひ遊ぶ、女は帶の結目いかめしく、男は羽織長う着なして法師老人ともにまじはり桶屋鍛冶屋の弟子こまで、暇得顔にのゝしるさま、さすかに都のけしきなるへし

川風や薄かき暑たる夕すゝみ

京都四條河原の夕すゝみで、夕方の月の頃から有明の月の落つる頃まで川の中に床を並べて終夜酒のみ物など喰つて遊んでゐる。女はいかめしく仰山な帶の結びやう、男は長い羽織を着て法師も老人も桶屋の小僧も鍛冶屋の職人も居る、それらが暇を得てうれしさうに騒いでゐる有樣も、流石に京都のけしきぢや、繁華ぢや、といふ前書。句中にある薄かきといふのは慥かにわからぬが、其頃流行した薄い柿色かなんかの帷子であらう、其の帷子を涼しさうに着てゐる人達が、川風に浴して夕すゝみをしてゐるといふ意で、京女の白い肌が夕月に透き通つてゐる景色までが見ゆる。

曲翠亭題田家納嬶

飯あふく嬶か馳走や夕すゝみ

田家納涼といふ題で曲翠亭で作つたといふのが前書。そこで田舍の樣を思ひやりて、夏の事であるから暑い飯は誰れもいやぢや、それを冷まさうとして嬶が團扇で煽いでゐる、その飯を煽ぐのが嗅の心ばかりの馳走ぢや、この夕涼みにといふ意である。嗅と田舍の呼言葉を使用したので田舍の趣が一字の間にあらはれ、且つ冷ました飯が馳走で何のまうけもないといふのも淡泊撲素な田舍の夕納涼に適つてゐる。斯く無雜作に叙して而かも趣を失はず、殊に嬶などの言葉を持つてくる所は流石に芭蕉翁が詩膽の大にして詩

境の廣い所に敬服せずにはゐられぬ。

雲芝亭

涼しさや直に野松の枝の形

涼しい事ぢや曲りくねりのない眞直な野松の枝の形はといふので、松の思ふ儘に伸んでゐる其の樣が如何にも心地涼しげであると言ふ意ぢや。全く客觀の涼しさうな景色ぢやが、幾分か人にも比して主人の涼しい心を賞した氣味もある。

野水新宅

涼しさは指圖に見ゆる住居かな

此の新宅の住居は實に涼しい、其の涼しさは此普請をした主人の差圖振りに見えてゐる、といふので、裏面には野水が淸く涼しい懷を賞してゐる處もある。

東武より上りて人々に對す

東路の毛膚はつかし床すゝみ

江戸から京都へ上ぼり來て人々に面會したといふ前書。東夷とも呼ばれた東路より罷出て、今ま此優美な都人と共に川原で床涼みをすると自分の荒らくれた毛膚が耻しく思はれるといふのぢや。旅に疲れた老人が毛膚などと武張つた口上も時に取つての座興である。

野明亭

涼しさを畫にうつしけり嵯峨の竹

嵯峨の藪を見ると涼しい氣持がする、其の涼しさは實に畫景の如し、といふのを畫にうつしけりと言つたのであらう。又た一方から解すると、涼しい景色をよく畫にうつしてゐるわい此の嵯峨の竹の幅は、

と或る畫幅を見て賞賛した句とも思はれる。何れにしても餘り面白くない句ぢや。

なまくさし水芦か上の鮠の腸

水芦の上に鮠といふ魚の腸の落ちてゐるのを見てアラなまぐさやといふ即事ぢや。

大津木節亭にて

秋ちかき心のよるや四疊半

夏の末で秋の近くなつた頃同じ心の友達が茶室などの四疊半に寄り集うて打語らふといふのを秋近き心が四疊半に寄る、と人魂でも集會するかのやうにいつた、是が詩趣味を構成する一種の手段ぢや。

春夏

芭蕉俳句評釋

終

明治三十七年五月十一日印刷
明治三十七年五月十四日發行

著作者　内藤素行
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷者　齋藤章達　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社　東京市日本橋區兜町二番地

（春夏芭蕉俳句評釋）
正價二十錢

著作權所有

發兌　東京市神田區鍋町二十一番地　電話本局三〇六七番　大學館

俳句入門叢書

第一編　俳句獨習　内藤鳴雪翁著　再版　價二十錢　郵税四錢

第二編　蕪村俳句評釋　佐藤紅綠君著　價二十錢　郵税四錢

第三編　其角俳句評釋　河東碧梧桐君著　價二十錢　郵税四錢

第四編　春夏芭蕉俳句評釋　内藤鳴雪翁著　價二十錢　郵税四錢

第五編　秋冬芭蕉俳句評釋　内藤鳴雪翁著　價二十錢　郵税四錢

第六編　新選俳句歳事記　寒川鼠骨君著　價二十錢　郵税四錢

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著

類題萬葉短歌全集

紙數四百五十頁　價二十五錢　郵税四錢

◎萬葉集は萬葉假名と稱する文字を以て書かれたれば閲讀に非常の苦心を要す依て本書は萬葉假名を普通假名文字に改めて研究者の便益を圖れり。

◎萬葉集は類題を設け集められたるため參考上不便の感ある故本書はこれを四季、應、雜の三編に分ち更にこれを諸部類に細別したり。

◎本書は紙質印刷に吟味を加へ袖珍に裝釘せられし等携帶に甚だ便利なり。

◎萬葉短歌四千餘首は悉く本書に載せられたれば新派舊派を問はず歌道に志すもの〻座右の寶典なり。

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著

西行法師　山家集評釋

價二十錢　郵税四錢

目次を摘記すれば法師の略傳、俗になりし時の法師、脫俗後の逸事、當時の歌壇に於ける西行、西行自身の歌に對しての考、西行の詞藻、西行法師の自作歌、閑散清逸の氣に富める歌、幽韻高致なる歌、纖麗巧緻なる歌、とりぐにをかしきもの、戀の歌の面白きもの等を擧げ且つ歌調を評し語句を釋き、春夏秋冬、戀、無常、神祇釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依つて最も平易に全編を評釋す。

94
199

087488-001-6

94-199

芭蕉俳句評釈

内藤　鳴雪／著

M37

DBE-0847